

---

# NETWORK LOVERS

XL エクセル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NETWORK LOVERS

### 【ネットード】

Z0256R

### 【作者名】

X-L エクセル

### 【あらすじ】

僕は余命半年の宣告をされた一人の人間。そんな僕はネットの向こうの彼女に恋をした。

2011/03/13時点で、この作品を諸事情あり、打ち切りにします。

また、時間が経った頃に完結させるかもしれません。

## 前編（前書き）

バレンタイン企画用に密かに執筆していた短編小説：のはずだった。区切りが良いので、連載扱い。全部書ききつたら短編にまとめる予定です。

ぶっちゃけ自分は何を書いているんだろうと思いつながら書いてるー作品。

まだ最後まで書いていませんが、今はきっとネガティブになってるんだろうなーって。

残りの余命は、あと半年。

ある日、僕はそう宣告されました。

僕の名前は浅川勇氣。普通の県立高校に通づ、普通の十七歳の男子高校生です。学校での僕はというと 正直、友達はいません。いるはずがないのです。

名前だけがそこにあり、存在そのものはそこになく。今の学校に、僕を友達と呼んでくれる人もいないし、ましてや僕の名前を、覚えてくれている人なんかいないはずだ。

「 おい、空を飛ぶってどんな気分なんだい？」

僕は入院している病院の窓から見える、大木に止まつた小鳥に話しかけた。

だけど問い合わせに小鳥が答えてくれる事はない。あるいは答えてくれているのだろうけど、僕は いや、僕達にはそれを知る術がない。

最近よく思う事がある。相手の気持ちが読める、わかるようにならないか、と。勿論、できるわけがないし、そんな事ができても、人道的に正しくないのもわかっている。

でも、でも僕にはそうしたいと思えるような出来事がある。それは今から二ヶ月前の事。ネガティブに言つと『死刑宣告』を出された僕は、何故か今までの自分が、やらなかつた事、やってない事をやろうと思った。だがスポーツなどの激しい運動はできない。だから室内でも、この病室といつも監獄の中でも、できる事をやろうとしたのだ。

「 父さん、母さん……僕さ、やってみたい事があるんだ」

父さんと母さんは、僕の言葉に揃いも揃つて、同じ返事をした。

余談だけど、僕は仲の良い夫婦である一人が好きだ。

「 ネットゲーム……つての、やってみたいんだけど……」

結局、僕が残る余命に選んだのは、ネットゲーム。普通に考えれば、馬鹿みたいに思える選択肢だけど、今の僕には丁度良い。人と接しなくなつてから長いし、何よりもこんな状態では人に会えない。ネットという媒体を使い、人と接する事ができるのは、とても素晴らしい事なんだ。

さて、話を元に戻そう。どうして僕が、人の考えがわかるようになりたいと思ったのか、それは恥ずかしい話だけど、僕はそこで会つた一人の女の子に恋をした。後々に知つた事だが、いわゆるネット恋愛というものらしい。最も片想いだけね。

そんな出来事の発端の話がこれだ。

まだネットゲームをやり始めたばかりの頃、ちなみにMMORPGなのだが、「うわっ、モンスターだ！」と、武器は……いや、それ以前に攻撃つてどうやるんだ！？」

完全にパニックっていた。ある程度、公式サイトの説明を見たつもりだったけど、完全に甘かったみたいだ。そのエリアでは、どんな初心者でもやられる事はないぐらいの、弱いエリアらしい。だけど僕は、そのエリアでやられかけている。

心なしか、周りの僕を見る視線が、やけに馬鹿にしているように感じる。

「う、うわあああああ！」

ただ叫ぶ事しかできなかつた。あまりのリアルさに、コントローラの握る手は、汗ばみ震えていた。

「 やあ！」

その時、残り体力少ない僕に、攻撃をしかけてきていたモンスターは、奇声をあげて突然消えた。

「おいおい、大丈夫かい？ 若葉マーク君」

やや小馬鹿にした態度に感じられたが、差し向けられた手の向こうには、とても優しい笑みを浮かべた少女がいた。

「あ、あの……」

「うん？ チャットも上手くできないのかな。良いって良いって、焦らずにゆっくりやりなって！」

その人の言葉に甘えて、僕は深呼吸をして、ゆっくりと文字を打つていつた。まだ手が震えている。これはモンスターとの戦いの余韻なのか、それとも人との久しぶりすぎるくらいの、ふれ合いからくるものなのか。

「あり……が、とう」

「うんっ、よくできました！」

やはり小馬鹿にしたような、喋り方だ。でも笑顔は優しく、緊張からくる心臓の鼓動も、少しづつ治まっていつていた。

「それで……君、初心者だよね？」

「あ、はい、そうです。右も左もわからなくて……それに緊張しちやつて」

「今時、ネットゲームで緊張？ あははは、ピュアな人もいるもんだねえ。あ、私の名前はミラ。君は？」

ミラとこう少女。名前的には外人なのだろうか。それにしても、日本語が上手だと素直に感じた。

「僕は 浅川勇氣です」

と、言つたのと同時に、ミラの口を塞がれた。

「ちょっと君、それ本名！？」

やけに慌てた風に、見えてるけど僕には理由がわからなかつた。

「ええ、そうですけど……何か不味かったですか？」

「不味いも何もつ、こうこうとこりでは普通、自分の本名は出さないんだよ！」

そうなのだ。これも後々知った事ながら、ネットではいわゆるハンドルネームというものを使うらしい。と、いう事は、このミラという少女も、ハンドルネームなのだろうと、僕は考えた。

「このゲームに登録する時にさ、プレイヤーネームを決めたでしょ

？」

「プレイヤーネーム？」

「あつちやあ……こんな事もわからない初心者だったのかあ……。まあ、良いわ、こうなつたら私がみつちり、教えてあげるわ！」  
やけに力の入つた『みつちり』という言葉と、そのやる気に満ちた顔に、僕は軽い戦慄を覚えた。

「あの……お手柔らかにお願いしますね？」  
「勿論！　スバルタ教育する程、私は怖い人ではないつもりですけど？」

「（（（（：。。）））」

「つて、何でチャットも上手くできないし、ネームも知らない奴が、顔文字なんて使えるのよっ！」

ミラは笑つた。僕はそんな彼女の笑顔を見て、心臓が高なつた。  
安っぽいかもしぬないが、確かに高なつたのだ。

「それで、プレイヤーネームは簡単な話、ハンドルネームと同じいつも良いと思うよ。細かく分別できるのかもしぬないけど、私は細かい事は好きじやないしね」

「へえ、ミラさんは大雑把な方なんですねえ」「ちょっと、大雑把とか言つなつ！」

「あ、すみません……」

変な意味は無かつたのだけど、もしかしたら気分を害してしまつたかもしれない。悪気はなかつたけど、僕は申し訳なく思い、俯いた。

「あ、いや、私は氣にしてないよ。だから　えと、それでネームは？」

「ネーム……ええと」

僕はステータスを試行錯誤して開き、自分のネームを見る。

「アサカワ、ユウキですね」

「そのまんまじゃない……本名系？　てか、本名か。じゃあ私はユウキって呼ぶね、だからユウキも私をミラつて呼んでね！」  
「わかりました、ミラさん！」

「さん、はいらないよ」

ミラはまた笑っていた。彼女につられて、僕も笑っていた。

何のヘンテツも無い。何の運命性も無い。何の偶然必然も無い。

それが僕と彼女 ミラとの出会いだ。

そんなミラとの出会いから、早一ヶ月が経った現在。僕は元気とはいえない体調だったが、それなりにネットゲームを満喫していた。ミラ繋がりで、友達、いやここではフレンドもたくさん増えた。現実の世界で望んでいた事が、仮想とはいえ実現したのだ。

僕のミラに対する気持ちも、仮想なのだろうか。

程なくすると、ミラから誘いのメールが届いた。

『みんなでクエストに行こう！　ユウキも来るでしょ？　てか、行く！』

という内容だった。

強引な内容かもしけないが、引っ込み思案で内気な僕には、ミラの多少なりとも強引なところが、心地好かったのだ。

その後、行くという方向でメールを返信すると、

『OK！　ユウキは私と同じチームね！　早く来なさいよ、置いてっちゃうわよ』

と、返ってきた。

僕がここまでメールを扱えるようになつたのも、一重にミラのおかげなのだが。

急いで目的地に行くと、ミラとフレンドの男性キャラクター

がいた。凄く親しげに話していて、僕と話している時には見せない表情だ。

「……っは！」

何となく、それを見つめる自分自身が嫌になつた。今、僕はどんな顔で一人を見ていたのだ。僕はこんなにも黒い人間だったのか。

「あ、ユウキ！　遅いぞ！」

「へえ、あいつがミライが教えてるって初心者か？」

「初心者つていつても、もう一ヶ月。立派なプレイヤーだよ、ユウキは」

「……ふうん」

その男性キャラクターは、僕に近づいてくる。とても強そうな見た目　というか強い。とても威圧的な目で、僕を見ていた。

「あ、あの、どうも……」

「おう、まあ宜しく頼むわ。レベルが低いクエストなら、俺がマジになる必要もねえだろ、俺は抜けさせてもらうぜ」

「あ、ちょっと……。全く、行つちやつたよ、あいつ」

その人は行つてしまつた。そんな流れを、追つとうつに見てるしかなかつた。

「ごめんね、ユウキ。せつかく誘つたのに、あいつ……」

「いや、僕は気にしてないけど」

これは本心だ。変な下心は無いけど、ミラと一人つきりになれる。ここ最近は一人でクエストをこなしたり、チャットする事も無くなつていたのだ。

「あいつさ、前々からあんな感じなんだ。弱いクエストっていうか、初心者嫌いなところがあつてさ。とにかく強い所に行つて、良いアイテム入手しにいく、効率重視系プレイヤーなんだよ。……良い奴なんだけどね」

呆れたような口調の、ミラの話を黙つて聞いていた。

「の人と……ミラは一体……？」

意識もしていない、無意識な言葉を出していた。言つてしまつてから、聞かなければ良かつたと後悔する。

「ん、ああ、付き合いの長いフレンドかな。もう一年にもなるかな

あ

一年。僕との一ヶ月とは、えらい違いを見せつけられる。やはり聞かなければ良かつた。左胸にチクチクと見えない針が刺さる。

「そつ……か

「あ、だからつて変な感情は持つてないからね。誤解しないでよー」

「うん……！」

出来る限り元気よく返事をしたつもりだけど、そうできていたであらうか。

「さあ、クエスト行け！あの馬鹿は行っちゃったけどさ、私がマンツーマンで鍛えてあげるわよ」

「うわあ、おつかないなあ……」

言葉の本心の中に、ちょっととの嬉しさがある。こんな程度の事で喜べる。何て単純で馬鹿なのだろう。そんな自分を見つめ、画面の前で、一滴の涙を流していた。

それからクエスト開始から数時間。ミラに遅れを取らないよう、僕は必死で戦い、そしてクリアしていた。

「ふう……」

「どうしたの、コウキ！この程度でへばった？」

「あはは……こう見えても、体力の無さには自信があつてね

「ふつ、それ普通逆だよ？」

クエストクリア後は、その場で笑い話をしていた。好きな事、嫌いな事。彼女の価値観は、僕とは違っていて、でもそこが参考になっていた。

そんな価値観に触れても、僕はミラに一切の嫌いな感情を持たなかつた。当然、それは僕が彼女に好意を抱いているからに過ぎないのかもしない。

恋は盲目、何故かそんな言葉が、頭の中に出てきていた。

「そういえばさ、ミクっていうんだ」「え、何が？」

「私の名前」

「だつて//リはま//リじゅ……？」

「違うよ、本名。東城未来っていうの」

突然の言葉。田の前の少女は、会った時から//リであり、東城未来という名前とのギャップがある。

「未来……//ライ……そつかつ！」

ミラのフレンドが呼んでいた、ミライといふのはこの事だったのだ。

「私だけユウキの本名知つてるのは、フェアじゃないしね。ユウキは信頼できる人だと判断したから、だから教えるの！」

「ミラ……」

心の底から、マグマのように沸き上がる衝動を感じている。歓喜の為なのだろうか。僕のコントローラを持つ手は震えていた。

「だからって、うつかり本名で呼ぶとかないようにね！」

「し、しないよ、そんなうつかりミスは……」

「どーかな、ユウキならありえるよー！」

「言つたなあ！」

「アハハハ、ごめんごめん。調子に乗りすぎました」

久しぶりにミラは笑っていた。いや全く笑わないわけではないのだ。ただ、僕にとってはその笑顔は輝いていた。

彼女が笑つてくれると、僕も最高に嬉しい。他人が笑つてくれる事を、他人が幸せでいてくれる事を、望んだのは初めての事かもしれない。願わくば、そこにいるのは僕でありたいと願う。しかし、現実という名の真実は、そんな密かで小さな願いすら打ち砕いていくのだ。

## 前編（後書き）

キャラの特徴とかは書きません。（予定）

物語進行と心情をメインにこいつと思っています。

誤字脱字、改行ミスなどがありましたら、お気軽にお知らせください。

## 中編（前書き）

本当にネガティブなオリジン。  
今は少しずつ、いつものポジティブ思考へ。

ある時、リラから明かされた一つの真実。

それはネットに向ひつて、本名とこひつの真実。僕らはお互いの本名を知ったのだ。

「容態はどうかな、勇氣くん？」

「はあ……まあ、普通といったところです」

「普通、か……」

何とも困ったといふような顔つきで、僕を見ている担当医。だが僕には、いつ言わざるを得ないのだ。

確かに体の弱さは認める。世間一般的にいふ健康体ではない。だが余命半年というのが、嘘のように感じる程、僕の体はピンピシんでいる。

「ふむ……また、様子を見に行くよ」

「はい、ありがとうございます、先生」

出てこひつとする先生を尻目に、僕はパソコンの電源を入れ、いつもネットゲームの起動準備をする。

早くミラに会いたい。会つてどうこひするわけでもないけど、ただ会いたいという感情が先走っていた。

「 勇氣くん」

「何ですか、先生？」

「君は明日、いや数時間後に大地震が起きて、死んでしまうな

「はあ？ 何を言つておるんですか、先生。そんなのわかるわけないじゃないですか」

先生は微笑氣味に笑いながら、

「 そうだな、わからないな」と答えた。

そして一呼吸置いてから、口を開く。

「 わからないからこそ、思つた事は早く伝えるべきなんだよ。私は

ね、若い頃に文通をしていた相手がいたんだ。今の時代のネットに近い関係だろう。私はそんな文通相手に片思いだつた

「恋文つてやつですね？」

「ははは、そう言われると恥ずかしいが……それで、ある時に彼女からの連絡が急に途絶えてしまったんだ。私は一体何があつたのかと、手紙に書いてあつた住所を使りに、失礼ながら自宅へと足を運んだんだ」

「……それで、どうしたんですか、その人は？」

僕が問いかけると、先生は出入口に向かいながら、続きを話してくれた。

「……自殺したそうだ。学校からの帰り道に、暴行を受けて……それを苦に、と私はその人のご両親から聞かされた」

言い終わると同時に、先生は退室していった。

その話の内容は、僕の心に多大な衝撃を与えたのだ。僕は確かにミラ 東城未来が、好きなかも知れない。だからこそなのか、今この話で東城未来という人の事を案じてしまった。

僕は、とても大きなため息を吐き出した。

「……どうしてだろう」

どうしてなのだろうか。

僕はミラのプレイヤーである、東城未来の姿形すら知らない。だからなのだろうか、姿形が見えない、いわゆる性格だけが剥き出しのフィールドだからこそ、僕は彼女に恋をしたのだろうか。

僕は、一体、どうする、べきなのだろう。

『こんにちは、ユウキ！ 今日は遅かったね、どうかしたの？ ちよつと心配しちゃつたよ（；^――^A』

考え方をしている間に、慣れた習慣で、体が勝手にゲーム画面を進めていたらしい。

メールはミラからで、

『ちょっと色々あって……。良かつたら今日もレベル上げのゞゞ指導宜しくお願ひします！』

と、返事を書き、送信する。

そして、しばらくすると、ミラからの返信があり、急いでそれを開けた。

『りょーかい！ 今日もバリバリやつていこうね！ ……話が変わったけどさ、今日もフレが何人か引退しちゃった……つて、こんな長くなりそうな話、メールでする事じゃないよね！ いつもの所で待ってるね、早く来てね』

こんなメール内容だった。

心なしか、ミラの悲しい気持ちが伝わってくるようだつた。

「……ミラ」

これも別れなのだろうか。

僕達のようなネットの住人は、現実のように顔は見えない。だからこそ簡単に出会いがあり、簡単に別れる事ができてしまう。

本当にそれで良いのだろうか。

出会いの数だけ、別れがある。その経験の数だけ、人は成長する。だが、そんな安易な出会いと別れが、はたして本当に経験になつているのだろうか。

僕は嫌だった。ミラとの出会いが、何の意味も成さないなんて、何の経験にもなつてないなんて、決して認めたくはない。現に外の世界を知らなかつた僕は、彼女から数えきれない事を、教えてもらつた。

じゃあ、彼女は僕と出会つて、何かを得たのだろうか。

そんな疑心暗鬼のような心だけが、今の僕にまとわりついている。

「そうだ、早く行かなくちゃ。ミラが待つてる」

だが今の僕には、揺るがない一つの小さな細い光がある。それは例えゲームといえど、彼女がそこで待つてくれているという、かけがえのない、小さすぎる真実だ。

僕がミラとの約束の場所にたどり着くと、そこには膨れつ一面で待つていてるミラの姿があつた。

「ごめん、待つた……よね？」

「遅い！ 激しい待つたつ、五分くらい」

「つて、たつたの五分じゃないか！」

「普通の五分と、心配の五分は違うでしょ……」

ミラはあまりにも小さな声で、その言葉を発した。おかげで僕自身は、何を言っていたのか微妙に聞き取れなかつた。

「さつ、早く行こうよ」

「そうだね、遅れた分を取り戻してみせるよー」

「うん！」

そうして僕とミラは、レベル上げに適したクエストへと出発した。さすがに慣れたダンジョンだけあってか、二人のパーティ構成だがスムーズに事が終わる。

「ユウキも大分、強くなつたよね」

「ミラのおかげだよ、ミラのおかげでここまでできたんだ」

「えへへ、そつかな？」

照れたような、嬉しそうな表情を見せるミラ。現実と仮想の見た目がどうあれ、ただ一つ言えるのは、彼女が喜んでくれると、やっぱり僕も嬉しいという事だ。

「ねえ……ユウキ……」

「ミラ？ ……どうしたのわ」

それまでの明るかつた表情を一変させ、俯いて今にも泣きそうな声を出す。突然の出来事に、僕自身、頭の中が完全に真っ白になつていた。

「ユウキは……ユウキは、ちゃんと一緒にいてくれるよね？」

「ミラ……」

「私、ここが好き。たかがゲームの世界かもしけないけどさ、みんなで遊んで……時間を共有し合つた場所だもん。そりや、私自身も、いつかはここから離れるのはわかってるよ……。でも……でもさ……やっぱ別れるのは嫌だよ、ネットだからつて……どうしてそんなに簡単に別れる事ができるんだろう？」

泣いていた。

ミラの嗚咽を聞いたわけでもない、流れる涙を見たわけでもない。でも、ミラは泣いていた。

僕は、僕達は、確かにネットという名の仮想で出会った存在だ。現実で出会つたわけではないかも知れない。いや、出会つてはないのだ。

だけど はたしてそれは重要な事なのだろうか。現実と仮想。二つは対ではないのだ。いつから一つは対のように仮想と現実と区別されたのだ。

同じなんだ。

現実と仮想ではない。現実という世界があるからこそその仮想なのだ。仮想の出来事は決して仮想ではない。仮想の出来事は現実なのだ。そして現実の出来事もまた現実なのだ。

彼女は泣いている。それは仮想なのか。確かにこの画面に見える、彼女の流す涙は仮想なのかもしれない。しかしこの画面の中の、仮想の奥の現実という場所で、彼女は仮想ではなく現実の涙を流しているのだ。

この事は、仮想ではない、現実なのだ。

「大丈夫、僕はここにいる。いるじゃないか！」

「ユウキ……。ありがとう」

ミラは涙でも拭いているのか、それから数分間だけ動かなくなつた。

この待ち時間の間、僕はふとある衝動に駆られてしまう。それはミラに想いを伝えようという事だ。だがあまりにも突然すぎる告白。それに僕自身、人との交流すら疎いのに、恋愛の、ましてや告白なんてした事もない。当然、された事もない。

画面の前の僕は、鼓動がこれ以上ない程に脈打ち、掌にこれでもかと言えるぐらいの、汗がにじみ出していた。まさか、人に想いを伝えるというのが、これ程に緊張するなんて、いや緊張と呼べるものではない。

僕は、自分の名前を何故か思い出し、情けなく思えてきた。

「「めん、お待たせ」

「うわおつー？」

「ど、どうしたの、ユウキ？」

自分でどうしたのかわからぬ奇声だつた。どうしよう、考えた事が一瞬で蒸発していき、体が思つたように動かない、いや体が動くように考えられない。

「ちょ、ちょっと、具合でも悪いのー?」

「い、いや、だ、だだ、大丈夫さ、っ」

「とても大丈夫そには見えないけど……」

「うだらうと思う。とても大丈夫ではない。代わつてもらえるの

なら、喜んで代わつてもらいたい。

「あ、あのさ……僕、ミクに、は、話があるんだ。話、突然だけど

……」

「え、話? なになに、今度は私が、ユウキの話聞くよ」

僕は僕自身に渴を入れた。ここまでお膳立てをした、ここで言わなければ、きっと次のチャンスはない。

でも、僕には大きすぎる一つの悩みがあった。それは僕の余命の事だ。あと半年、いや数ヶ月と言つても良いのかもしない。

そんな少ない余命を持つ人間から、告白なんかされでは迷惑にならないだろうか。いや、十中八九、迷惑になる。でも、僕の心中に溜まつた感情は、既に破裂寸前のところまで、きいていたかもしれない。

「あの……その……」

「何よ、そんなに言つのが難しい事なの? 男ならバンと言つてみなさいよー。」

「そのつ、僕は、ミラの事がつ、を……す……」

駄目だと思つてしまつ。ここまで勢いで言つてみたけど、どうしても次の言葉が出てこない。意図的に出さないようにしてしまつている。

もしも、もしもこの言葉を言い、成功したのなら良いのかもしだ

ないけど、失敗したらどうなる。もう、この瞬間までの一人には、どうやつたつて戻れない。それを失つてしまつのが、何よりも怖いんだ。

「……素敵な、人だと思つてゐる

「えつ……！」

結局は言えなかつた。

でも、あまりの心臓の高なりに、あまりの恥ずかしさで、僕はミラと同じ場所に、これ以上いられなかつたんだ。

「…………ごめんっ、今日は僕、もつ落ちるねっ、また……明日、会おうっ！」「――

半ば強引に、僕はログアウトして、ミラと別れた。

数分後、落ち着いた頭で、よく考えてみた。あれは不味かつたのではないかと。とにかく、明日になつたらミラに会って、今日の非礼をお詫びしよう。

「う、あ……地震か？」

突然、体が揺れた。まるで立ちくらみのような感覚で、最初は自分の体調からくるものかと思った。

病室にあるテレビをつけて、状況確認をする事にした。

『…………県にて、震度七の非常に強い地震を観測しました』

「すぐ近くというわけでもないのに……凄い揺れたなあ。やつぱり、自然災害って恐いな」

しばらくは情報をおつていく為に、テレビをつけっぱなしにしていた。

そして、僕は気づかない間に深い眠りについていたんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0256r/>

---

NETWORK LOVERS

2011年3月13日11時40分発行